



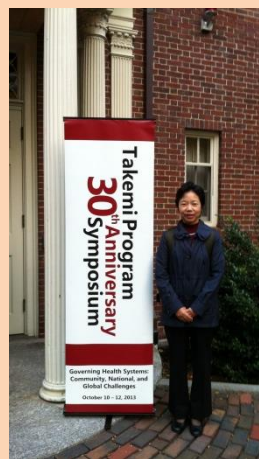
19. ポストン福島シャトル便 最終回

ボストンからの帰りの飛行機の中です。今回は武見国際保健プログラム 30 周年記念シンポジウムで 3 泊 5 日の短い旅でした。前回シャトル便で Halloween のことを書いてから、すでに 1 年経ちました。右の写真は前泊したホテルのディスプレイです。



帰国してから 3 か月間で、すっかり元のルーチンに戻った一方で、ボストンを「引きずっている」感覚を楽しんで生活しています。説明するのは難しいのですが、無意識にボストンでの生活を思い返してなぞりながら福島で生活している感じです。意識的に仕事と生活を区切るようになりました。そのために、時間的には仕事と生活が混在するようになっています。具体的には、(講座主任が顔をしかめそうですが、) 職場でやらなければいけない仕事は 5 時前に切り上げて帰路について、家事と育児をして子どもの顔を見ながら、家でできる仕事を続けています。頭の切り替えが前よりしっかりできるようになったので、こんなリズムが良くなったのかもしれませんが。このリズムで随分と仕事も生活も効率が良くなりました。そして、ボストンに来てみたり、調査地を県外に設けてみたりと、外にも意識を向けられるようになりました。不思議なものです。

帰国してから 10 か月間の研究成果を、日本では日本医師会の報告会で、ボストンでは 30 周年記念シンポジウムで発表する機会に恵まれました。医師会の発表は自分一人で分析した結果についてですが、シンポジウムでの発表は少し変わった試みです。福島における保健師の震災後の活動と、ザンビアにおける教師の HIV/AIDS 予防活動を比較して、地域レベルでの health



governance について検討するというものです。同期の武見フェローと一緒にケースメソッドという手法を使って分析した研究で、community health workers を中心に保健活動を進める枠組みを提示しました。変わった試みだったからか、発表後に多くの方々に話しかけていただけました。写真は 2 人でお昼休みに撮りました。

この2日間のシンポジウムには、世界中から武見フェローが集まり、それは豪華なメンバーでした。2日間 Lancet の編集長が出席されて、最後に（名物）スピーチまでして下さったのには驚きました。こんな場で発表出来たのは、本当に良い経験でした。右の写真は初日のお食事会で、すごく遠くに見えるのがスピーチをしているライシュ先生と武見先生です。イベント合間のお茶やお食事の時に他のフェローと新しい研究の企画を沢山話したので、これからどう実現するか考えていこうと思います。



そして、ボストン滞在中に、申請していた World Bank Institute が主催する国際保健のセミナーに合格したと嬉しい知らせが来ました。Harvard, Oxford, World Bank, World Health Organization の講師陣から、ヘルシステム強化について東京で学ぶ 10 日間の合宿です。今回のシンポジウムでも、気軽な会話でさえ自分の（ひどい）知識不足を感じる事が多々あったので、しっかり学ばないといけません。

シャトル便はこれで最終回にします。帰国後に何人かの方々から読んで下さっていると聞いて嬉しかったです。年内はアップしておいて、その後は「講座紹介」の「海外留学について」の部分に残す予定です。留学中のご支援ありがとうございました。



ハーバード公衆衛生大学院 100 周年 “Leadership for a new century”

